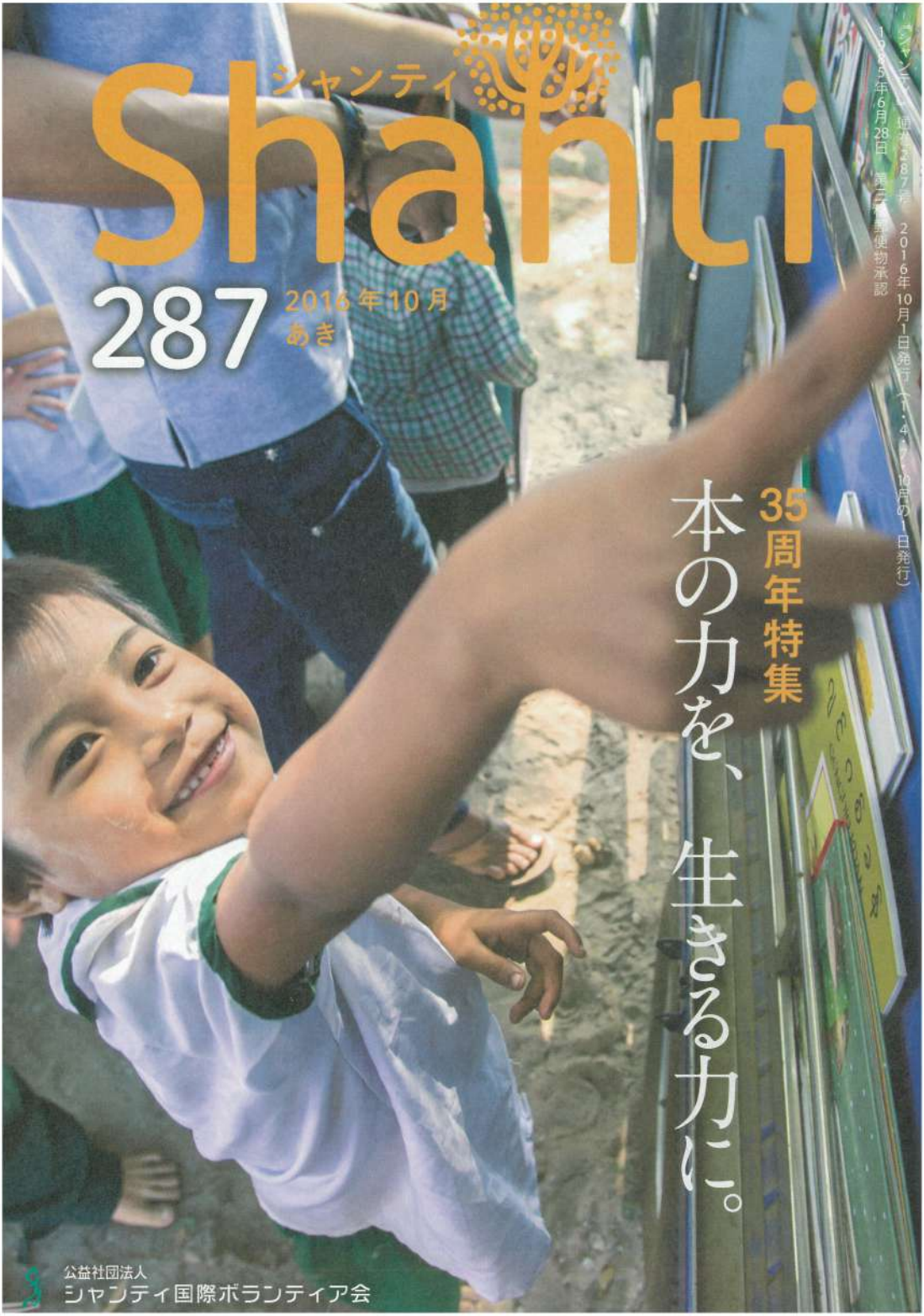


# シャンティ Shanti

287

2016年10月
あき

（シャンティ通信287号　2016年10月1日発行（1・4・7・10月の1日発行）
1985年6月28日　第三種郵便物承認）

35周年特集

## 本の力を、生きる力に。

公益社団法人
シャンティ国際ボランティア会

表紙写真：移動図書館車から読みたい本を探すミャンマーの子ども
目次写真：ミャンマー（ビルマ）難民キャンプ内の図書館
（ともに写真：川畑嘉文）

1981年の設立以来、人びとに寄り添い、耳を傾け、何ができるのかを共に考え続けてきた私たちの原点は「本」でした。

本は、知識を得て、学ぶことの楽しさを教えてくれます。先人から受け継がれる文化や歴史を知り、世界への視野を広げてくれます。大切な信念や価値観に触れることは、生きる喜びや、思いやりの心を育んでくれます。

紛争や貧困、自然災害などの大きな問題と比べると、本が与える力はとても小さく見えるかもしれません。しかし、そんな本との出会いが、今日までシャンティの活動を支えてくれました。

そんな本の可能性に託してきた人の想いと、本を通じて未来を拓いてきた人たちをご紹介します。

# Index

シャ・ティ 287号 目次


04 35周年特集
**本の力を、生きる力に。**
なぜ図書館活動だったのか
各国スタッフのライフストーリーと子どもたちの今
シャンティ35周年を迎えるにあたり
シャンティのことがもっとよく分かる6冊

18 **シャンティな人たち**
佐藤涼子（子どもと読書のコーディネーター＆ストーリーテラー）

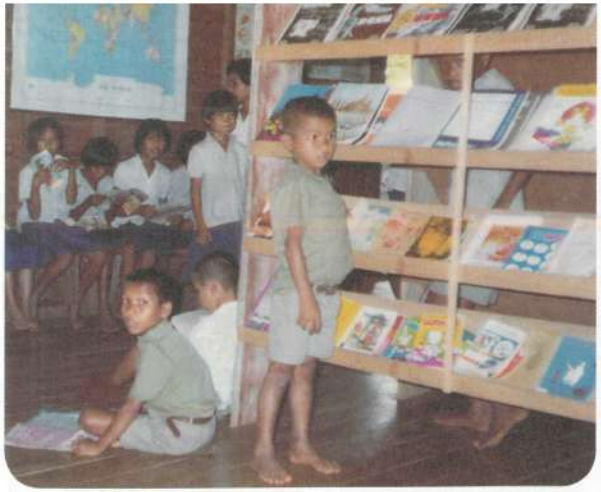
20 **定点観測：アジアから**
カンボジア／ラオス／ミャンマー（ビルマ）難民キャンプ／アフガニスタン／ミャンマー／タイ／岩手／山元

28 **世界の絵本を読んでみよう**
『いも虫とカラス』民話絵本　カンボジア

30 **緊急救援活動のご報告**

31 おしらせ／編集後記

32 道「シャンティの活動を通して学んだこと」
会長　若林恭英



1・2》カオイダン難民キャンプの図書館内の様子（1981年）
3》サケオ難民キャンプ内の図書館の様子（1981年）

2

1

「35周年特集」

# 本の力を、生きる力に。

2016年12月10日、シャンティは設立35周年を迎えます。これまで活動を続けてこられたのも、皆さまがシャンティの活動を応援してくださったおかげです。35年前、なぜ「図書館活動」からはじまったのか、これまでの活動を通じて、人々の暮らしにどのような変化をもたらしたのか。シャンティの原点を、今再び、振り返ってみたいと思います。

**八木澤克昌**
アジア地域ディレクター兼
ミャンマー（ビルマ）難民事業
事務所所長

| | |
|---|---|
| 1980 | シャンティの前身、曹洞宗東南アジア難民救済会議（JSRC）設立。カンボジア難民支援として図書館活動を開始。タイ事務所開設。 |
| 1981 | 曹洞宗ボランティア会（SVA）を結成 |
| 1991 | カンボジア事務所開設、タイに現地法人シーカー・アジア財団を設立 |
| 1992 | ラオス事務所開設 「曹洞宗国際ボランティア会」と改称 |
| 1999 | 社団法人シャンティ国際ボランティア会となる |
| 2000 | ミャンマー（ビルマ）難民事業事務所開設 |
| 2003 | アフガニスタン事務所開設 |
| 2011 | 気仙沼事務所、岩手事務所開設。 |
| 2012 | 山元事務所開設 |
| 2014 | ミャンマー事務所開設 |
| 2016 | ネパール事務所開設 |

## 「何故、図書館活動だったのか」

シャンティが海外で活動を開始したのは、1980年に遡る。難民救援に関して全く経験のない、シャンティのような小さな素人の団体にできることには限界があった。私たちは、当初から難民問題の本質は、民族の文化的アイデンティティの喪失の危機と考えていた。

命からがら身一つで祖国を逃れて、難民キャンプに避難する人々がキャンプから持ち出すことのできるものは、教育によって身に着けた知識と手に付けた技術。心にしっかりと自らの文化的アイデンティティを刻めば、将来祖国に帰還した時や第三国に定住した際に生きる勇気と自立につながる。

私たちは教育支援プロジェクトの中で移動図書館プロジェクトを選択した。図書館活動を行うにもカンボジア語の本がない。ポルポト政権下で、大半の書物が焼失してしまっていたからだ。タイ語の絵本をカンボジア語に翻訳するところから始めた。そして難民キャンプでのカンボジア語の図書の復刻や出版活動へと展開していった。

衣食住は、人の体を守り、支えるもので、本は心の栄養になる。難民キャンプでは心の飢えと渇きがある。文字を知ること、学ぶことは、人間の生きる力と尊厳につながる。これこそ35年前に私たちボランティアが「触媒」としてカンボジアの難民キャンプの図書館活動の経験を通して学んだ原点だ。

この原点が35年の年月を経てタイ、カンボジア、ラオス、ミャンマー、アフガニスタンなどの国や民族、文化、宗教の違いを超えて各国の事業へと広がっている。

# 新しい命を困難の中にいる人々のために使いたい。

**ユン・ヴィスナー**
カンボジア事務所バッタンバン・フィールド事務所マネージャー（1995年入職）

私が10歳の頃、カンボジアではクメール・ルージュが実権を握りました。小学校の教員だった父は、職を奪われ、強制労働を強いられました。家畜の世話をしていた父は、不慮の事故で牛2頭を失い、公の場で厳しく罰せられ、殺されてしまいました。

クメール・ルージュ体制が崩壊した1979年に、私は初めて小学校へ通い始めました。当時、私はクラスで最年長の14歳で、年下の子どもと一緒に勉強することはとても恥ずかしかったです。その後、中学校を卒業した1989年には、カンボジア・タイ国境で抵抗軍と政府軍の間で激しい戦闘が発生しました。政府は中学校を卒業した若者に兵士となるよう義務を課したため、母は船で他の非共産国に逃れようと提案しました。

船で逃げ出したまでは良かったものの、船は嵐で難破し、多くの人が命を落としました。九死に一生を得た私たちは、なんとかインドネシアの難民キャンプへ渡り、いくつかのボランティアや仕事を経て、1995年にシャンティへ入職しました。何度も命を脅かす出来事に直面してきた私は「もし生き伸びることができたら、私の新しい命を困難の中にいる人々のために使いたい」と思うようになりました。

**日本の皆さんへ**

カンボジアでは、何千人もの生徒が卒業し、教師や看護師、医師、公務員、企業の従業員など様々な職業に就いています。日本の皆さまの支援なしにはここまでの活動を行うことはできませんでした。カンボジアスタッフを代表して、深く感謝を申し上げます。



# カンボジアでの活動

1991年〜

## Before

私たちは最も貧しく、遠方で困難な状態のコミュニティを中心に活動しました。多くの子どもたちは学校にはおらず、学校にはボランティアの先生がいるだけ。治安が悪く、地雷が埋められている場所もあり、通うことすら難しい危険な環境でした。

## After

読み聞かせや移動図書館活動の重要性を伝えるため、セミナーや勉強会を開催しました。こうした活動を国の教育政策として提案しましたが、不安定な政治情勢のため、最初は受け入れられませんでした。しかし、報告や会議を重ねることで、徐々に重要性を理解してくれ、1996年から全国おはなし大会が実施されるようになりました。また、2016年には「国民読書の日」が制定されたことも、カンボジアでの25年間の活動の成果の一つです。

（写真：川畑嘉文）

# 日本人は困難に挑戦することを励ましてくれた

**ヴァン・ラム**
小学校の校長
支援当時は小学5年生

1992年、2つの木造校舎がシャンティによって建設された当時、私はバッタンバン州のボンアンピル小学校に通う5年生でした。当時出会った外国人が「勉強を続けるように」と励ましてくれたことは今でも覚えています。私は学校を卒業した後、母校で教員となり、2013年には校長になりました。これまでの24年間で教えてきた卒業生の中には、教員や医者、看護師、政府関係者などの仕事に就いた人もいます。また、たびたび学校へ訪ねてくれる日本人は、先生や子どもたち、人びとがあらゆる困難に挑戦することを励ましてくれます。これは夢を持って一生懸命勉強する若い世代にとって自信になっています。

**カムコン・クンチャムヌン**
ラオス事務所プロジェクトマネージャー
（2004年入職）

## 子どもの成長や未来に向けた手助けを。

私は2004年10月にシャンティに入職しました。その前は、ドイツ政府の開発援助機関の職員としてラオスのナムグム流域の環境保護事業に携わっていました。山を削って耕作する人向けの農業指導や、環境保護活動などを行ってきましたが、農村部の貧しい生活状況や子どもを取り巻く過酷な教育環境を見る機会が増え、次第に子どもへの教育を支援する団体で働きたいと思うようになりました。

子どもにも環境保護の大切さを伝えるべきだと強く思い、活動に組み込むように嘆願しましたが、団体の方針から外れるという理由で聞き入れられませんでした。

それでも、子どもの教育に対する関心が高まった私は、「子どもの教育」を生涯の仕事にしようと決め、2004年にシャンティに入職しました。

シャンティに入職した私は、これまで絵本・紙芝居出版、図書箱配布、子ども図書室の運営、移動図書館活動、青少年活動、公共図書館事業など、多くの事業に関わってきました。

そして、ようやく自分の仕事に意味を見出し、誇りを持てるようになりました。

**日本の皆さんへ**

これまで多くの子どもたちがシャンティと出会ってきました。彼らの成長を助け、未来に光を照らす一助になれたことをとても嬉しく思います。そして、引き続き「子どもの教育」を生涯の仕事として頑張ってまいります。



## ラオスでの活動

1992年〜

### Before

絵本・紙芝居出版は、以前はシャンティの職員が編集に関与せず、良い絵本とはどういうものかを追求する意識は高くありませんでした。1992年から2009年にかけて、図書箱の配布も行い、年間約100校、のべ1400校を超える小学校に図書箱を配ってきましたが、配布後の使用状況を追跡するのがとても大変でした。

### After

専門家から出版研修を受けて以来、良い絵本を作りたいという意識が高まっています。それまで公共図書館がなかったラオスで、図書館の人材育成や運営の知識の習得、図書の拡充、利用者増加を目指して、各県で図書館建設やトレーニングなどを行なってきました。その結果公共図書館が自ら運営予算を立てて管理していくことまでできるようになりました。また、一昨年とある小学校を訪れた際、古くなった図書箱が今も使用されていました。今でも現役で活躍しています。

（写真：川畑嘉文）

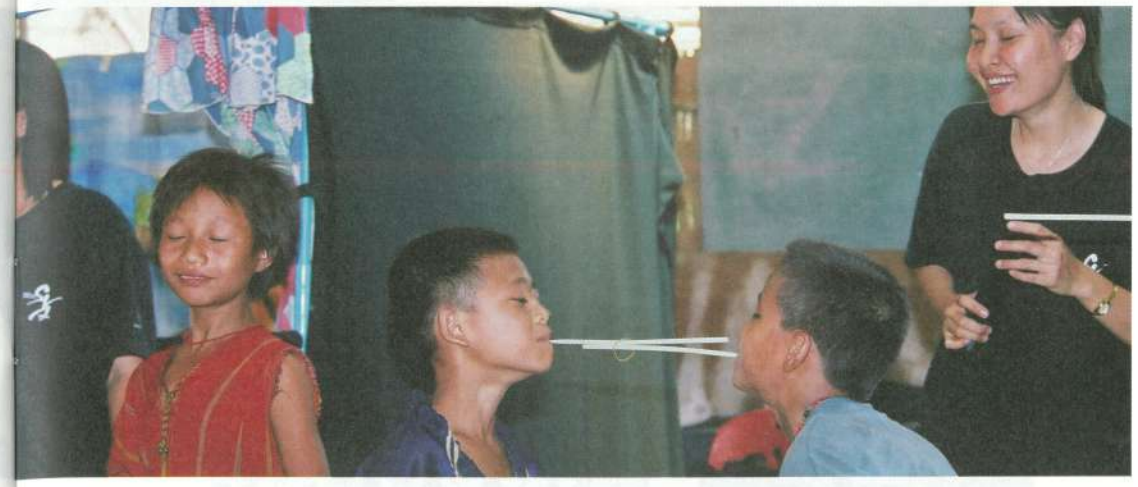
## 13年間図書室に通い続け、図書館の管轄省庁職員に。

**ペッソンマイ**（カムコン談）
省庁勤務

1993年から2014年まで、ラオス事務所内に常設されていた「子ども図書室」には、たくさんの子どもたちが通っていました。中でも印象に残っているのは、ペッソンマイです。彼女は2歳から約13年間通い続けていました。

毎週土曜日、朝から夕方まで図書室を利用し、多い時には一日に5冊も読破していました。私の娘と図書室で友達になってから、よく二人で一緒にいました。長編の「ロード・オブ・ザ・リング」を借りて一晩で読んできたときは驚かされました。読書推進イベントでは利用者のリーダーとしてシャンティの職員を手伝ったり、絵本を読み聞かせたり、図書室通いを楽しんでくれました。

21歳になった彼女は昨年大学を卒業し、今は図書館を管轄する情報文化観光省で働き始めています。



**ジラポーン・ラウィルン（セイラー）**
ミャンマー（ビルマ）難民事業事務所
所長代行（2001年入職）

## シャンティは同じ夢を持つ、1つの大きな家族。

シャンティに入る前は難民キャンプ内の学校で教員をしていました。どの学校でも、教材や教員が不足し、教えることがとても難しかったことを覚えています。この状況を少しでも改善させたいと強く感じていた私は、2001年に図書館アシスタントコーディネーターとして雇われて以来、さまざまな形で図書館事業に携わってきました。

実は、学生の頃に図書館員を経験したことがあります。読み聞かせや人形劇を通して、子どもたちが多くを学び、幸せになれる活動の面白さを日々感じていました。

ここでは言い尽くせませんが、図書館が人々に希望を与え学ぶ機会を作ってきたのを見てきました。以前は技術や知識もありませんでしたが、今ではシャンティと共に歩んだ15年分の経験があります。多くの困難にも遭いましたが、仕事や私生活に活かせる価値あるものを多く学んできました。

シャンティのスタッフは例え、違う国で活動していても、各々の背景が違ったとしても、同じ夢を持ち、同じビジョンとミッションを掲げる1つの大きな家族だと感じています。

**日本の皆さんへ**

日本の皆さんには、難民が直面している困難へのご理解と、活動へのご支援をいただき、感謝申し上げます。彼らにとって厳しい時期が続いていますが、どうか応援いただければ幸いです。



## ミャンマー（ビルマ）難民キャンプでの活動

2000年～

**Before**

活動を始めた当時は、図書館は静かに本を読む場所だと思っていた人が多く、想像していた仕事や場所と違ったため、仕事を辞めていく図書館員もいました。

**After**

難民キャンプという閉鎖的な空間の中、図書館が子どもたちが自分を解放できる場所であることが徐々に認知されるようになりました。今では、難民の人々にも教育の重要性が理解され、彼ら自身が図書館をより良いものにしていこうと献身的にサポートしています。利用者だけでなく学校教員や図書館委員会、青年ボランティアなど、以前にも増して多くの人々が図書館事業に関わっています。

（写真：川畑嘉文）

## いつか僕も子どもたちを楽しませてあげたい

**カリームトゥー**
図書館青年ボランティア

メラマルアン難民キャンプで生まれ育った15歳のカリームトゥーは、図書館青年ボランティア（以下、TYV）として、図書館活動を支えています。幼い頃から図書館で過ごすことが大好きで「TYVの人たちが行った人形劇が忘れられない。いつか僕もTYVになってあの頃の自分のように子どもたちを楽しませてあげたい」と話します。以前から、図書館の掃除や本の整頓など図書館員の仕事を手伝っていた彼は2015年3月にTYVの一員となり、毎日時間があるとき図書館を訪れ、子どもたちに読み聞かせをしたり、本の貸し出しを手伝ったり、他のメンバーと協力して積極的に活動しています。

その姿勢が認められ、2015年12月16日、彼は「最も活躍したTYV」として表彰されました。

2014年～

# 日々の活動に活力を与えてくれる“声”

中原亜紀
ミャンマー事務所所長

ミャンマーで事業を開始してから約2年半が経ちました。2000年にミャンマー（ビルマ）難民キャンプでの事業が始まった時、近い将来、ミャンマー本国でも活動が始まるだろうと思っていました。難民の帰還はまだ本格化していませんが、2011年に民政移管が行われ、徐々に民主化に向けた動きが進み始めています。その流れを受け、2014年にミャンマーに事務所を開設し、ミャンマー国内での事業を開始しました。

これまでに寺院学校改善やノンフォーマル教育、公共図書館改善、児童図書出版改善に向けて事業を行ってきました。まだ日が浅く、ミャンマー人職員たちも経験がないため、毎日が試行錯誤の連続です。それでも活動が少しずつ実を結んできていることも感じています。

三輪バイクを使った移動図書館活動に対し「もっと頻繁に来てもらえないでしょうか。喜んでいる子どもたちの姿がまた見たいです。」と教員たちから歓迎する声がありました。貧困のため小学校を修了できなかった子どもに対して行っているノンフォーマル教育では「子どもが家に帰ってくると、必ず私に向かってその日に教科書で学んだ部分を読んでくれます。一日の中で一番幸せな時間です。」と言ってくれる親もいました。老朽化し、劣悪な環境だった寺院学校で新校舎建設を行うと「新校舎で勉強できて本当に嬉しいです。もっと勉強して、テストに必ず合格してみせます」と4年生の男の子が満面の笑みで話してくれました。

こうした声は日々の活動に活力を与えてくれます。ミャンマーの子どもたちの未来のためにスタッフ一同、手を取り合い頑張っていきたいと思います。

2016年～

# 緊急救援から震災復興へ

山本英里
海外事業課課長

2015年4月25日にネパールを襲った未曽有の地震により、家屋や学校など公共施設が被災し、全壊家屋60万軒以上、およそ47万の教室が被害を受けました。シャンティは、地震発生直後から緊急救援事業として、124の仮設教室の設置や7ヵ所の女性用の公共シェルターの支援を実施しました。

世界最高峰エベレストを連ねるヒマラヤ山脈を誇り、お釈迦さまの生誕地でもあるネパールで、震災支援を通して触れた人々の生活は想像以上に厳しいものでした。ネパールでは、1996年から2006年の11年間、政府軍とマオイストの間で内戦となり、農村部や山間部では激しいゲリラ戦が繰り広げられ、ようやく戦後初の新憲法が成立されたのは、くしくも大地震が発災した2015年でした。

目立った国内産業もなく、多くの男性たちは国外へ出稼ぎに行き、残された女性や子どもたちが農作業で食いつないでいます。震災前から農作業への従事や経済的理由による子どもたちのドロップアウトは大きな課題でした。また、貧しい村落では人身売買とは知らず、子どもたちをだまし取られてしまう事例も報告されています。震災で校舎がなくなったことで、子どもたちの学校離れも懸念されています。

シャンティでは、カトマンズに事務所を新設し、ヌワコット郡とラスワ郡を対象に、被災した校舎の再建、絵本の読み聞かせなど図書館活動を通した子どもたちの心のケア、今後も予想される震災に備えるため、学校教員、生徒、地域住民を対象にした防災教育の普及を実施していく予定です。ネパールの子どもたちが1日でも早く普段の学校生活を取り戻せるよう応援をお願いいたします。

ラオス　ヴィエンカム郡の子どもたち（写真：川畑嘉文）

# シャンティ35周年を迎えるにあたり

事務局長　**関尚士**

カンボジアから逃れてきた人々への寄り添いから始まったシャンティの歩みは35年の時を経ました。これまでに図書館を800ヵ所設置し、延べ1000万人以上に本に触れる機会を提供してきました。活動国では、民話絵本など436タイトル、75万4503冊を出版。教員・図書館研修には2万8000人が参加。建設した小学校は4ヶ国で722棟に上ります。また「絵本を届ける運動」を通じて日本から届けた翻訳絵本は25万冊を超えました。数々の取り組みとチャレンジを通じた失敗と学びが、今のシャンティの活動の糧となり礎となっていることを改めて実感します。

困難から人生を切り拓いてきた人々が社会を担う世代となり、教育や本の力、アイデンティティとしての文化を彼ら自身が胸を張って語り始める姿に出会えるようになってきました。このことこそがシャンティの役割の意味を説いてくれています。この大きな実りは、日本人に限らず、各地の数えきれないスタッフやボランティア、住民とともに成し遂げてきたものです。

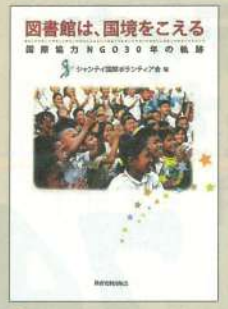
共に生き、共に学ぶ。この理念のもとに集まった一人ひとりの悪戦苦闘と試行錯誤の積み重ねが、今のシャンティの取り組みにつながっています。現場に立つ者と同じ考えの元、支え、共に歩んでいただいた多くの人々に改めて心から感謝いたします。

今なお、戦乱や災害、差別、貧困の中で人々の尊厳が失われています。知り、考え、伝え、権利、機会、未来を人々が手にしていくため、シャンティの取り組みをこれからも前進させていきたいと思います。

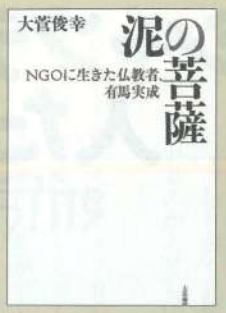


# BOOK GUIDE

シャンティのことがもっとよく分かる6冊




1




2

3

**図書館は、国境をこえる**
**――国際協力 NGO30 年の軌跡**
シャンティ国際ボランティア会編／教育史料出版会／ 2011 年

シャンティの 30 周年を記念して、図書館活動に参加したスタッフが自らの体験を基に執筆した一冊。アジアの国々で図書館活動を行う意義とは。子どもたちの笑顔に支えられてきたシャンティの歩みをぜひご覧ください。**1**

**泥の菩薩**
**――NGO に生きた仏教者　有馬実成**
大菅俊幸著／大法輪閣／2006 年

シャンティ立ち上げの中心人物で、シャンティの精神的な支柱であった故・有馬実成の生涯をまとめた一冊。仏教者としての役目を問い、日本の NGO の先駆者として道なき道を歩み、死の間際まで命を燃やし続けた僧侶が見つめていた世界とは？ **2**

**図書館への道**
**――ビルマ難民キャンプでの 1095 日**
渡辺有理子著／すずき出版／2006 年

タイ・ミャンマー国境に点在する 7 ヵ所の難民キャンプでは、今なお 10 万人以上の難民が暮らしています。そんな難民キャンプで図書館建設と人材育成に取り組んできた著者が、図書館活動の意義を紹介。**3**

4

**ハジババと 1000 頭のロバ**
**――震災・神戸からアフガニスタンへ**
市川斉著／筒井書房／ 2003 年

当時、アフガニスタン事務所長を務めていた市川斉（現・常務理事）による復興支援ドキュメント。米英軍の空爆やタリバン政権の崩壊などで注目されたアフガニスタンを写真や雑学コラムを交えながら紹介。**4**

5

**ラオス　山の村に図書館ができた**
安井清子著／福音館書店／2015 年

少数民族モン族が住むラオスの山間の村に図書館ができた様子が綴られています。絵本に接する機会のなかった子どもたちが絵本を手にしたときのはじけるような笑顔から、図書館ができた喜びが伝わってきます。**5**

**アジア・共生・NGO**
**――タイ、カンボジア、ラオス国際教育協力の現場から**
曹洞宗国際ボランティア会編／明石書店／ 1996 年

シャンティの前身、曹洞宗盗難アジア難民救済会議（JSRC）や曹洞宗国際ボランティア会当時の活動をまとめた一冊。カンボジア難民救援活動から始まった 15 年にわたる活動の記録です。**6**

6

# シャンティな人たち

शान्ति

vol. 74

## 佐藤涼子
## さとう・りょうこ

子どもと読書のコーディネーター＆ストーリーテラー
元シャンティ専門アドバイザー
（2016年4月まで）

長年日本の子どもへの読書活動を行ってこられ、本の専門家としてシャンティの図書館活動にご協力くださった佐藤涼子さんにお話を伺いました。シャンティが図書館活動を始めた頃から、東日本での移動図書館活動に至るまで、シャンティの図書館活動を見守ってくださった佐藤さんが思うシャンティの魅力とは？

2007年に絵本・紙芝居作家のやべみつのりさんと一緒にアフガニスタンの図書館を訪問したときの佐藤さん（右）

### シャンティの良さは「粘り強さ」

シャンティと初めて出会ったのは1993年です。タイやラオス、カンボジアで児童図書館活動に力を入れていると聞き、興味を持ったのが最初のきっかけです。翌1994年に初めてラオスを訪問しましたが、現地での図書館活動はまだまだ手探りの状態だったと思います。シャンティの日本人スタッフが、熱い思いを持って、粘り強く課題に取り組んでいるのがとても印象的でした。

日本もイギリスやアメリカの図書館活動に学ばせてもらってきたので、今度は私たちがアジアの国でお役に立てたらと思い、活動に関わらせてもらいました。いろいろな国で研修を行いましたが、日本の公立図書館で20年近く勤めた経験が本当に現地の役に立つのか不安でした。それから、言葉が違う点でも悩みました。日本語から英語、英語から現地語への二重通訳を初めて経験しました。読み聞かせの手法は見てもらえばわかるものですが、大事なのは、読書の大切さが伝わることですから、翻訳しやすいように言葉を選んで伝えなければなりませんでした。

ラオスはのべ4回、アフガニスタンやカンボジアにも行きましたね。はじめてラオスを訪れた頃は、シャンティはまだ組織や人材的に発展途上で、図書館をつくるけれど、その先の活動は未知数でした。一緒に話し合い、分かる範囲の提言もさせてもらいました。その国が求めることとこちらが提供できることの接点を模索しながら、当時のスタッフが粘り強く議論を重ね、少しずつ活動に反映され、活動が実を結んでいった実感があります。とにかく図書館活動は「こんなこともできるんだよ」とか「読書は楽しいものなんだよ」と伝えたいと一生懸命でした。そして、現地のスタッフがやがて図書館活動を担っていくことを願っていました。

当時のラオスは日本と雰囲気が似ていて、ラオスの人々も日本人と通じるところがありましたね。なので、経験が役立つなら嬉しいという素朴な気持ちが引き出されていきました。最後にラオスを訪ねたとき、「図書館協会を作る」という命題に向かっていて、その後、実際に図書館協会ができたことはとても嬉しかったです。このように、シャンティの活動の歴史が作られる過程を見られたことは、今思うと幸せなことだったと思います。

シャンティの良さは「粘り強さ」だと思います。活動の中で、混沌として割り切れないこともあるけれど、いろんなことを切り捨てないで、粘り強く取り組んでいく姿勢があるんじゃないのかな？そして、それがなくなったらシャンティらしくなくなっちゃうと思います。

最後に、子どもたちが自分の頭で考え、行動できる、自立した市民になるために図書館が果たす役割は大きいと思います。いろいろな情報をどう選び取るか、それを学べる場所が、図書館だと思います。

（聞き手：常務理事 市川斉）

## カンボジアで支援をはじめてから25年

報告：玉利清隆（カンボジア事務所）

**Cambodia** カンボジア

カンボジア事務所は1991年に設立され、支援活動を始めて25年が経過しました。この間、カンボジアの経済は大きく成長しましたが、その一方で貧富の差は拡大傾向にあり、100万人を超える住民が現金収入を求めて隣国に出稼ぎに行っている状況です。

教育分野においても、小学校の進学率は98%まで上がりましたが、教育の質やアクセスには未だに問題を抱えており、義務教育であるにも関わらず中学校への進学率は50%強に留まっています。

また、高等教育を受けた人材の質も周辺国よりも低いと言われており、産業人材の育成という点でも課題を抱えています。カンボジアでは、引き続き長期的な課題である教育の問題に取り組み、幼児教育やコミュニティ図書館、ならびに学校建設などの活動を続けていきます。今後ともご支援の程、よろしくお願い申し上げます。

## どこにいても、誰であっても。

**ラオス Laos**

報告：加瀬貴（ラオス事務所）

1992年にラオス事務所を開設して以来、図書館支援や初等教育支援の分野で多くの活動を実施することができました。

対象者、対象地は変われども、変わらなかった大切なことがあります。それは「支援を必要としている人に必要な支援を届けること」です。困難な状況にある人々に寄り添いながら支援を実施してきました。時には壁にあたり、うまくいかないこともありました。それでも、そんな皆さんの「笑顔」に支えられてここまで来ることができました。

現在の事業地もラオス国内の山岳僻地です。そこで出会ったプーサリー小学校のブンニャン先生は「私の村は田舎で、都会の生活とは何もかも違うけど、ここで子どもたちの教育を良くしていくことに意味があると思って帰ってきたんだ」と言います。「どこにいても誰であっても」教育の機会を届けられるように、これからも応援していきたいと思います。

（写真：川畑嘉文）

## 難民キャンプでサッカーフェスティバルを開催

報告：八木澤克昌（BRC事務所）

**BRC** ミャンマー（ビルマ）難民キャンプ

「世界難民の日」の6月20日、タイ国境にあるウンピアム難民キャンプで、元Jリーガーを招いてサッカーフェスティバルを開催しました。Jリーグや在タイ日本大使館などから後援をいただき、今年で5年目を迎える恒例行事となっています。

今回の指導役は昨年と同じく、Jリーグ・ジュビロ磐田の元選手でバンコク在住の本田慎之介さん。幼い頃から絵本好きとして知られる本田さんは、キャンプの図書館で子どもたちにサッカー絵本「ミラクルゴール」を読み聞かせてくれました。

閉鎖的な難民キャンプで世界を広げ、夢に向かって困難を克服してもらおうと始めたサッカー教室には、雨上がりにも関わらず約150人の子どもたちが参加してくれました。サッカー教室が始まると子どもたちは大興奮。泥と石が交じる広場で、はだしやサンダル履きの子どもたちが笑顔でボールを追いかけ、歓声があふれました。

今後も難民キャンプの人々に寄り添い、活動を続けてまいります。

## 子ども図書館で防災訓練を行いました

アフガニスタン **Afghanistan**

報告：三宅隆史（アフガニスタン事務所）

ジャララバード事務所の1階で運営している子ども図書館で防災訓練を行い、120人の子どもが参加しました。アフガニスタンでは2015年10月26日の日中にマグニチュード7・5の地震が起きた際、北部のタハール州でパニックになった女子高校の生徒40人が校舎の2階から逃げようとして階段で将棋倒しになり、死傷する事故が起きました。アフガニスタンは地震の多い国であるにもかかわらず、防災教育はほとんど行われていません。

防災訓練では、指導者が「地震が起きました。みんなどうするの?」と問いかけ、それぞれ自分の身を守る行動をとります。怖がって泣き出す子どももいましたが、防災意識を高める良い機会となりました。アフガニスタン事務所では2016年、ジャパン・プラットフォームから支援を受け、防災紙芝居を2つ製作し、図書館活動を通じて学校でも防災教育を普及していく予定です。

支援を受けた子どもたちがアフガニスタンの平和を築いていける様、今後も応援よろしくお願いします。

## 絵本が少しずつ身近な存在に

報告：中原亜紀（ミャンマー事務所）

**Myanmar** ミャンマー

タヤワディ県の公立図書館に児童スペースがオープンしてから「これまで図書館に一度も来たことがなかった子どもたちが通うようになった」、「読み聞かせを楽しみに図書館員を待つようになった」という声が聞かれるようになり、嬉しい限りです。

現在は日本とタイから届いた絵本と、ミャンマー国内で購入した3種類の絵本と児童書が配架されています。図書館を訪問した時、「ぐりとぐら」や「おおきなかぶ」などの絵本を手にした子どもたちの姿を見かけました。研修会で伝えられた「子どもと本を結びつけ、子どもに読書の楽しさを伝えること」が図書館員によって実践されている成果だと思いました。

初めは、今まで見たことがない日本やタイからの絵本を手に取るのを躊躇していたミャンマーの子どもたちでしたが、絵本が少しずつ身近な存在になりつつあります。

今後もミャンマーの未来を担う子どもたちに寄り添って活動を続けてまいります。

## 苦境の中で奮闘するカレン族の奨学生

報告：吉田圭助（シーカー・アジア財団）

**タイ Thailand**

タイ・ミャンマー国境のムイ川に接するターク県ターソンヤン郡。山岳地帯をうねる国道105号線沿いに、公立メーサリットルアン学校があります。カレン族で高校1年生のパタマーさんは、傾斜に建つ高床式の家で祖母と障がいを持つ姉の3人で暮らしています。祖母は高齢のため駄菓子売りを休む日が続いています。パタマーさんは、村のお寺で掃除をしてもらえるお小遣いを家族の食費に充て、祖母と姉の身の回りの世話をしています。

「暮らしは本当に大変ですが、奨学金のおかげで私は学校に通うことができています。将来の夢は学校の先生になることです。同じ境遇の子どもたちを励ましたいと考えています」。

アジア子ども奨学金は、全体の約50%をターク県の中高生に授与しています。大半はカレン族の生徒で国籍が無い生徒もいます。奨学金は、貧困層の子どもたちの学びの機会を支えています。

## 陸前高田コミュニティー図書室友の会のみなさんが大活躍

報告：吉田晃子（岩手事務所）　岩手 Japan

仮設団地内で運営している陸前高田コミュニティー図書室に、「陸前高田コミュニティー図書室友の会ブックマ」ができて約2年半が経ちます。会員6人で発足し、現在は8人に増えました。

「図書館の場所が分かりづらい」という意見があった時には看板を設置したり、「開館しているか分からない」という声には「開館のお知らせ」ボードを設置するなど、友の会の皆さんにはスタッフだけでは手が回らないところを助けていただいています。看板を設置してからは「迷わず来られました」という声が多く寄せられました。

2016年5月からは、毎月第3木曜日と金曜日を「本格コーヒーの日」とし、挽きたての豆を使ったコーヒーの提供もはじめました。友の会の皆さんに、コーヒーのいれ方講座で学んだ成果を発揮していただき、コーヒーの香りが広がる部屋で、利用者に本を片手にゆっくり時間を過ごしてもらっています。

## いつかそれが「日常」になる日に向かって

報告：古賀東彦（山元事務所）　山元 Japan

2016年7月12日、福島県南相馬市の原町区の一部と小高区に出されていた避難指示が帰還困難区域を除き解除されました。それに合わせて、12日朝、JR常磐線の原ノ町駅～小高駅間の運行も再開されました。15日には、小高図書館と埴谷島尾記念文学資料館も再開館しました。

福島第一原子力発電所の事故から5年4カ月。新しい生活を求めた方も多く、避難指示が解除されても、以前と同じ生活が営まれるわけではありません。「ここからがスタート」、「解除は節目であって祝う日ではない」など、さまざまな声が聞かれました。

7月下旬に行われた伝統の相馬野馬追祭では、震災で中断していた100年以上の歴史をもつ「火の祭」が小高区で6年ぶりに執り行われ、数千の花火とかがり火が小高の夜を照らしました。「震災前」ではなく「いつもの」「今年も」という言葉で語られる「日常」に向けて、少しだけ前に進み始めました。

世界の絵本を読んでみよう 15

# いも虫とカラス

カンボジア
民話絵本　1993年（2011年再版）

**1**

ある日、いも虫が木の葉を食べているところに、えさを探していたカラスが飛んできました。カラスに食べられると思ったいも虫は「ぼくを食べたいなら、ぼくのなぞなぞに答えてからにしてよ。」とカラスに言いました。

**2**

いも虫はカラスに聞きました。

「1・いちばん甘いものはなんだい？
2・いちばんすっぱいものはなんだい？
3・いちばんくさいものはなんだい？
4・いちばんいい香りのものはなんだい？」

**3**

カラスはこの簡単ななぞなぞに答えれば、いも虫を食べられると思い、カーカー喜びました。そしてカラスは答えました。

「いちばん甘いものははちみつと砂糖。いちばんすっぱいものはレモンライムとタマリンド、ソンダンやクロサン（木の実）、そして酢。いちばんくさいものは糞と動物の死骸。いちばんいい香りのものはロムドゥオル（花）、ジャスミンと香水だ」。

**4**

しかし、いも虫は全部間違いだと言いました。カラスは驚き、ふに落ちない顔をしています。

**5**

いも虫は、「ぼくを食べないでね。」とカラスと約束し、答えました。

「いちばん甘いものは、正直に忠実に美しい言葉で話すことだよ。いちばんすっぱいものは、乱暴な言葉で話すことだよ。いちばんくさいものは、悪いことをすることだよ。いちばんいい香りのものは、いいことをすることだよ。」

答えを全部聞いたカラスは、いも虫を食べるのをやめました。

◎この民話には、日本の「一寸の虫にも五分の魂」のように、どんなに小さく力が弱い者にも意地や想いがあり、それらを軽視したり、無視したりしてはならないという教訓が込められています。

# 緊急救援活動のご報告

ご協力
ありがとう
ございました

## 熊本県での支援活動完了報告

2016年4月14日以降に発生した熊本県を震源とする地震で被害を受けた地域で食事サポートや入浴サービス、集いの場づくりなどの支援活動を行いました。シャンティは発生直後に職員を派遣し、3ヶ月間熊本市東区・中央区と益城町の22ヵ所の避難所で支援を実施し、延べ710人の避難者が活動に参加しました。熊本地震に対するこれらの支援活動は、れんげ国際ボランティア会と連携して実施しました。

## ネパールでの支援活動完了報告

2015年4月25日にネパールで発生した地震で被害を受けた地域での緊急支援活動を2016年7月末に完了しました。これまでに124の仮設教室の設置や7ヶ所の女性用公共シェルターおよびチャイルドフレンドリースペースの支援、学校校舎2棟の支援を実施してきました。今後、シャンティによるネパールでの活動は、緊急救援から震災復興と教育支援へと移行していく予定です。皆さまのご理解とご協力を引き続きよろしくお願い致します。

# シャンティからのお知らせ

## 「社会貢献者表彰」と「外務大臣表彰」を受賞

シャンティ専門アドバイザーである手束耕治氏が第46回「社会貢献者表彰」を受賞されました。1984年からタイの難民キャンプで活動し、長年シャンティ国際ボランティア会の職員としてカンボジアの発展に貢献してきたことが功績として認められての受賞となりました。

また、日本と外国との友好親善関係の増進に多大な貢献をし、顕著な功績のあった個人や団体の功績を称える平成28年度「外務大臣表彰」に、シャンティ顧問の足立房夫氏とシャンティ専門アドバイザーの手束耕治氏のお二人が選ばれました。

## 「シャンティ35周年記念式典」のお知らせ

35周年記念式典を下記の日程で開催いたします。シャンティの35年を支えて下さった皆さまと共に、未来へ向けた取り組みを考える場を設けたいと思います。みなさまのご参加をお待ちしております。

日時：2016年12月10日（土）15:00-20:00
会場：芸能花伝舎（東京都新宿区西新宿6-12-30）
第1部　講演会「本の力を、生きる力に。」
第2部　懇親会、寄席

詳細は同封のチラシをご覧下さい。

## 人事のお知らせ

●入職

**山田哲也**（契約職員）
ミャンマー事務所 事業コーディネーター（6月8日付）

**阪口佳代**（契約職員）
ミャンマー事務所 事業コーディネーター（8月1日付）

●退職

**長沢有華**（契約職員）
ミャンマー事務所 教育改善事業担当（6月8日付）

**白鳥孝太**（正職員）
気仙沼事務所 統括責任者（7月20日付）

**東さやか**（契約職員）
気仙沼事務所 東日本大震災救援事業担当（7月20日付）

**三木真冴**（契約職員）
岩手事務所 所長代行（8月31日付）

**千葉りか**（契約職員）
岩手事務所 経理総務担当（8月31日付）

## 編集後記

最近、編集者の活躍を取り上げたドラマに夢中になっています。4月に放送されたTBS『重版出来』やNHK連続テレビ小説『とと姉ちゃん』では、登場人物たちが壁にぶつかりながらも奮闘している姿を見ると「がんばれ！」とつい心の中で応援している自分がいます。読者がいてはじめて成り立つモノだと肝に銘じて、今後も「シャンティ」を読んでくださる読者の皆さんのお役に立つ誌面づくりに取り組んでまいりたいと思います。（召田安宏）


リサイクル適性Ⓐ
この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。

GREEN PRINTING JFPI P-B10164

ミックス 責任ある木質資源を使用した紙 FSC® C009309

VOC FREE™

「シャンティ」は、FSC®森林認証紙にノンVOCインキ（石油系溶剤0%）で印刷しています。

シャンティ　2016年秋　287号
2016年10月1日発行

発行人　若林恭英
発行所　公益社団法人シャンティ国際ボランティア会
〒160-0015東京都新宿区大京町31 慈母会館2・3階
TEL 03-5360-1233　FAX 03-5360-1220
WEB：http://www.sva.or.jp　E-Mail：info@sva.or.jp
郵便振替 00150-9-61724
編集人　関尚士
装丁・レイアウト　矢萩多聞
印刷　株式会社大川印刷　［定価550円］


©2016. Shanti Volunteer Association. All Rights Reserved. Printed in Japan.

●当会へのご寄付は、所得税、住民税および法人税、相続税の優遇措置が受けられます。

巻末言

# 道

子どもたちは生来、逆境を乗り越えようとするエネルギーを持っているものだと感じます。

## シャンティの活動を通して学んだこと

会長　若林恭英（わかばやしきょうえい）

カンボジア難民報道が盛んにメディアをにぎわしていた1970年代末頃、今のシャンティの前身が活動を始めた頃でした。地方の寺院としてこの活動に同調する中で、その先達たちから多くを学ぶことができました。

例えば、日本仏教の歴史の中には、教えに基づき身を挺して布施行（ふせぎょう）、いわゆるボランティア活動を行った祖師方が宗派を問わずきら星のごとく居られたことは、まさに生きた仏教の伝統があることを実感しました。代表格として奈良時代の行基、平安時代の空也、鎌倉時代の叡尊とその弟子の忍性、江戸時代の鉄眼など、当時の世間からは菩薩・聖人と尊称されるほどでした。また、有名無名を問わず、仏教者として困難な状況にある人々に支援の手を差しのべていた先達の事跡に出会うこともできました。一方、目を転じて南方上座部仏教を垣間見る中で、大乗を以て誇りとしてきた近代日本仏教のあり方と、どちらが庶民に近いかを問う機会ともなりました。結局シャンティの活動を通して学んだことは、ご縁のなかで、自分たちの生き方が問われているのではないか、ということでした。

近年、時代のニーズに応えて「開かれたお寺」が先進的としてクローズアップされていますが、30有余年前から私が見てきたアジアのお寺は、村の人々と文字通り敷居のないつながりをもって存在しています。もし興味のある方は本年もシャンティ主催の「ミャンマーの仏教文化を訪ねる」ツアーを計画していますのでご参加ください。

こうした機会に現場を訪れて感じるのは、貧困から来る諸々の困難にもかかわらず、子どもたちの笑顔の輝きは脳裏に焼き付いています。子どもたちは生来、逆境を乗り越えようとするエネルギーを持っているものだと感じます。そうした意味から困難は必ずしも悪くはない、ただ、将来に希望の光が僅かでも見えるよう黒子として支援できれば、シャンティの活動は目的を果たしたと言えるでしょう。こうした現場で思うのは、日本の青少年との交流の場を作ることが、お互いの刺激につながって行くのだろうと35周年の節目で考えているところです。

（長野県・安楽寺住職）